

きづねのちと

NO.116 刊
月

昭和四十三年二月一日 発行 非売品
 岡山県新見市吉備町東町一五五 垣方電三三
 吉備製菓店 会
 藤川

○ 東林山真如院 (その二)

本堂は入母屋造本瓦葺屋根にして奥行三間、間口五間、向拝付である。内陣は別に二間の建物を附けてゐる。この本堂は明治四十年の頃、当山の義瑞僧都が淨財を募つて再建したもので、もと小堂なつたが朽壞したので再興した。よつて義瑞僧都を当山の中興の祖と仰ぐのである。建築に当り工事費に不正のことがあり棟梁某との間に紛争を生じたという。正面には「瑞光院」の扁額をなかけ中央内陣には阿弥陀如来の尊像を安置してゐる。この本造は昭和廿九年一月一日岡山県の重要美術品に指定されてゐる文化財にして吉備阿唯一のものである。

本尊の両脇には本彫りの金剛力士と密迹力士の巨像が安置されてゐる。この佛像はもと馬場の中程にあつた仁王門の尊像であつたが、建物が損壞したので全軒取拂ひ、尊像のみを本堂に移したものである。身長は六尺五寸にして高さ一尺五寸の座の上に立つてゐる。二体とも慶長十二年の彫刻にして、口も背銘に「奉新造慶長十二年 現住 法印 尊賀」

奉再興 明暦ニ申元 現住 隆海
 奉再興 天保十四卯天 九月吉日 佛師 岡山 丸龜町 山野十郎
 右衛門貞武 宮内 片山 中山カ葺

の墨書がある。慶長以後二回に亘つて修理が施されてゐるが落色は甚だしく剥脱して居り素人の手によつて諸々修理されてゐるが、鬼受けの彫り。金剛力士は梵語の跋折羅の訳にして那羅延金剛ともいひ、勇猛悍悪の相をなせ千佛の法を守護する神なので寺門の右に安置する。密迹力士は密迹金剛ともいひ、金剛力士と双対の神として左側に安置するものである。

この二尊像のはげしい怒りの様相をあらわしてゐるのは自己の慾望が満足出来なかつたため怒つてゐるのではない。外から迫まる不正とぬから起つてくる煩惱に対して心かたう怒つてゐるのである。正義のための怒りである。やがては衆生を導いて修行への道を教へてゐるのである。

当山の岡基を尋ねるに正縁起書并に古文書は後冷泉天皇の康平年間(一〇五八-一〇六四)頃に築葺けられ火を被した際急ぐ焼失したので詳々にすることば困難であるが、和銅年間(七〇八-七一四)の建立と傳へられ、天平勝空年間(七四九-七五六)に報恩大師の再興になるといふ。(別項参照)中頃吉備津大明神の正宮、岩山宮、本宮、内宮、新宮、即ち五社の別当寺の座主の要職にあつたこともあるという。当寺の報建の古いことは寺の庫裏と新宮社止の弁天池との間を留まり、先年藤原時代と推定せられる古瓦の外七角の古器物が出土したので立証せられる。現に当寺に保存せられるものは

一 巴瓦 直径五寸 藤原時代

- 一 文字瓦 阿弥陀如来を現したもので 藤原時代
- 一 巴瓦 珠文 廿二個 三ツ巴 直径 四寸五分 鎌倉時代か
- 一 巴瓦 三ツ巴 珠文 二十二個 直径 四寸二分 鎌倉時代
- 一 唐草瓦 三ツ巴 三個を列ねた幅一才二分 藤原時代
- 一 唐草瓦 線上 珠文列 線下に巴八個 幅二寸直径八寸 藤原時代
- 一 巴瓦 三ツ巴 珠文 鎌倉時代

などである。また地名として「とうのたん」(三重の塔のあととろう)「まえんどう」(堂北分)などがある。往昔は寺領二千七百石を有し廣大な境内には堂塔伽藍が完備し一時は白香山ニ指有奈坊を管理するなど寺運は隆盛を極めたが、保元平治の乱に平家は兵馬のために荒廢し平家時代になつて所領は悉く没收せられた。しかし改められて僅かに寺領として朱印百六十石を保有したに過ぎない。其後教度の兵乱が起つて寺坊は漸く衰微し維時因准となり末寺も退轉し或は他宗に走り僅かに昇龍山半願寺 神宮寺 自心坊 法愿寺の四ヶ寺を管理しただが、本願寺は不法のことがあつて寛文三年、倉敷代官竹垣三右衛門の裁許に過つて追院となり、金山の遍照院へ退き、そのあとには吉備津宮社人の役所になつた(つまりの旧社務所となる)又神宮寺は寛文七年に本宮と共に火災に遇ひ再興する筈であつたが、社人賀陽兵部同治郎右衛門等の誣訴によつて社僧側が敗れを再興するに至らず寺傳の佛器具、古文書等を推つて遍照院へ移した(別項参照)本願寺と同様の寺運を

地つたのである。この際本尊十一面觀世音菩薩は一時在所の住人陶山伊左衛門といふものが持ち帰り、毎年正月に神宮寺のあつた屋敷あとに仮堂を建てて参詣人に拝觀せしめたものである。寺址は今の御釜殿の前の、寺道場の處にして昔は芝原でここに芝居、見世物等の興行を催してつた場所である。

かくして中頃は法灯衰微して満前の金山遍照院の兼帯にあつたこともある。明治維新神佛分離して吉備津宮の別当職を解かれ獨立し今日に至つてゐる。東山表参道石柱に

明治四十年春彼岸日 在詣人 東山中 建立者 中山善太郎
 宗祖 傳教大師 中備 西回廿四番 社所 天台宗 真如院
 同 西回陸二番
 本堂前の石灯籠に 奉納 寛政十二庚申八月吉日
 賴主 茂間茶右エ門 同 興惣次

石段の銘に

明治九年五月十日 穀旦 当精舎七拾八在 現住 権訓導 今田賢養代
 奉寄附 奉起人 塚家 教

在詣人 当所有松権蔵 中山勝五郎 岡田松右エ門 板谷村
 遠藤仲治 的場光造 秋山卯吉 宮内雄波初三郎
 当所有松千代造 岡田徳蔵 中田村竹村 新 当所有

松友弥 作内仁吉 桂川村袖岡新祐 当所中山精夫郎
西山西 赤木伊左エ門

当山はこの地方では最も古い時代に属す創建であるが古文書に乏しく従って歴代の住職を知ることは極めて困難である。ここに過去帳と墓域にある数基の墓銘を列記した。思ふに無住であったことや他の寺院の兼帯であったことなどの時代も続いて法灯の乱れを物語るものもある。しかし石段の銘に明治九年十月七十八在買恭代と刻んでゐるので法系は永く由緒の深いことが窺われる。

- 一 永寂年月なし 曼要師親然
- 一 明暦年間 隆海
- 一 延宝三年十月八日 秀海法印
- 一 延宝八年正月廿七日 買崇法印
- 一 元禄十一年六月廿一日 権少律師買海法印
- 一 享保十九年六月九日 権少僧都 秀崇
- 一 延享三年二月廿八日 買祐権律師 賀郡坂孝人 僧都 義瑞之塔
- 一 明和九年壬辰天九月十四日 法印 秀親 義瑞は当山中興の祖といわれ姓は片岡氏である
- 一 安永九年十二月廿六日 慈観法印 伯父に當る寂靜心院義観僧正は東叡山執当に
- 一 天明八年七月九日 円観法印 しく岡山真如院の住職である。戊辰の役に現法親
- 一 寛政元酉年六月二日 大河岡梨心観塔 王を推して奥州に難を避けて徳川家の西朝業再

起を因つたが上野彰義隊の塔は破山僧正は囚人となつて獄中に遷化すと云う。学徳兼備にして信念の頑革固なる僧であつたという。

△ 天台宗金山遍照寺は岡山市牧石の山中にある。四單に銘金山金山寺と稱する古刹である。創建は天平勝宝元年(七四九)報恩大師の岡基にかり昔は備前四十八ヶ寺の首座に位し然も比叡山、高野山に匹敵する代表的山岳伽藍の一つである。

報恩大師は養老二年(七二八)備前一宮町芳賀の山村復し、農家に生れた。元亨釈書に「報恩大師は孝謙天皇の付け給う者也史は須弥といはれしと云う。当國(備前)津高郡馬矢御波河村の人也、中叡」とある。幼にして法華^經の摩訶大師の教えをうけ、後ち是の法燈を嗣いだ。法華^經と云うはソマの津高町の日鹿寺の前身である。天平九年(七四七)に修行のため寺を出て大和國(奈良県)吉野山に入り法相宗義を研學し加持祈禱の修法を習ひ天平勝宝二年(七五〇)に孝謙天皇御不豫の時加持咒法を修めて靈驗をあらわしたので報恩大師の稱号を授けられた。後ち勅許を得て備前國に四十八ヶ寺を建立し、ついで思島の法勝寺、瑜伽寺、備中の日差山性徳院などを始め和泉國に子島寺を創建した。この時代に直如院は再興せられた。延暦三年(七八四)に桓武天皇が長岡の宮に眼疾に悩まされた時大師をして大悲咒を修められたが悉ち快癒せられたので報恩とて子島子を官寺に定められた。大師は延暦十四年(七八五)六月廿八日七十八才で子島子に遷化せられた。当寺の本尊自在菩薩丈五五寸は大師が吉野方面の三鈷の岩の靈木で刻んだという。大師の首向は延鏡は日差山の岩身に於て、後ち京都清水寺の岡山となつた高僧であるが、その残木をも

つて同じ千手観音菩薩を刻み清水寺の本堂に奉安した。また清水寺二世の心浄大師ももとは日差山で修行した高僧で、此も報恩大師の双壁といわれる。

金山寺はもと西に十糸町ソツた妙見山の頂にあつたが延久元年五月に火災にかつたので、もと心浄大師が建てた現地の智地寺の殿を再建移したのである。臨濟宗の開基で吉備津宮の社人加賀陽氏から出た宗西禪師も若い頃金山寺に留錫し自ら着削してソツた直經や蒙波などを遺して立去つてゐる。

文龜元年に金川城主松田悳並元賢は日蓮宗の信奉者にして、威圧によつて当地を日蓮宗に改めんとした。か幸僧が強く拒絶したので山中に火を放つて塔伽藍を悉く焼き掃つた。この時宝物や什物を多く失つた。其後七十余年を経過して、今伯耆の人で豪田という高僧が復興した。豪田は姑の比叡山東塔地福院の主であつたが大山寺及び大山寺を兼任して、備前田主宇喜多直家は豪田に帰信し、諾堂の復興に盡力した。そして寺領五千九百石を寄進した。かその子弟家り時に没収した。よつて豪田は豊臣手力吉に訴えて、旧に復せしめた。然るに文祿三年に再び山川兵部が入部して没収したのでまた訴訟して三千石を新知したといふ。江戸時代に至つても将軍家より米印状を受け、寺領百八十六石六斗に定むるも、また備前藩主からも寺領百六十五石と斗二升を寄進せらるるなど、殊過を受けつた寺院である。

○天台宗の祖は支那の天台大師の教えを傳えたものである。天台山に住してソツたので天台大師といふ。此講は智觀(志)といふ。支那の梁の武帝の大同四年(五三八)に荊州に生れた。梁が滅して一族は離散し父母もなくなつたので十八歳の時に相州の果願寺に入つて出家した。幼時

から聰明といひ、此三十歳の時に道宣律師の傳へる律宗を學び、また陳の文帝の天嘉元年(五六〇)二十三歳で老州の天竺山に南岳大師に師事した。後、瓦官寺に八年住し、太建七年九月(五七五)三十八歳で天台山に入り、五十五歳で法華經を講じた。隋の世になつて並日王の帰依によつて智者の号を賜つた。後、荊州の当陽の玉泉山に一時入つたが、また天台山に歸り、後、石城寺で六十歳で入寂した。

天台大師の弟子に章安大師があり、六代の妙樂大師に至つて最も興隆を極めた。その弟子に道邃、行滿、元皓、智度、道暹、華雲、望等がある。この道邃和尚が天台法門を傳授、大師に傳へ、我國に拓らつたのである。

傳授大師は講は最澄、又は三津首、石枝といひ、先祖は漢の孝獻帝の末孫の登萬と云ふといひ、我國に歸化した人である。神護景雲元年(七六七)に生れ、十二歳にして出家して比叡山に入りて一心に修行し法華經を修得し、天台大師の教えを説いた。桓武天皇はその魂徳に感じせよとて、内侍奉(禁中)で御祈念をする役(に)列した。三十六歳の時に南都六宗(俱舍、成実、律、法相、三論、華嚴)に於て天台法華經によつて法護し破つて歸伏した。此後、この六宗は衰へて天台宗は榮えた。三十八歳の時に入唐し、天台大師より七代妙樂大師の弟子行滿座主及び道邃和尚にソツて師事した。歸國後は嵯峨天皇の信任厚く、比叡山に天台宗を拓めた。弘仁十三年六月四日、比叡山中道院にて入寂した。時に年五十六歳であつた。

(南都六宗)といふは、いまの日蓮宗は日蓮上人、浄土宗は法然上人といふ風に宗祖といふ言ひ葉はなく、大陸から僧や留学僧が持て歸つた經典や注釈書を携へて來るを中

心として東大寺や大安寺、元興寺、法隆寺で盛んに講義したものであつて、僧となるにはこの六宗を兼学しなければならぬのである。

ここに神佛分離にフツて述べる。

もともと我國は固有の神祇信仰の一筋であつたが、印度に起つた佛教信仰が十七世紀の末に大陸から朝鮮を経て傳來し本地垂迹説に基いて一千數百年も神佛習合が行われきた。本地とは印度の佛をいひ垂迹とは我國の神をいひ、その神々は佛の化身として現世したという神佛同一の説である。八幡菩薩とか金毘羅大権現とか、うのはその一例である。それが明治の改革によつて新しく朝廷を中心とする政府が起り國学者の蒸斗といわれ本居宣長や平田篤胤などの國体明徴の教を起つた敬神の念にたぎる入道が多くなり、ついでに後佛運動が起り明治元年三月に天皇親制國家がうぢたてられ、神道中心主義が強く喝えられ明治二年三月には神祇官が復された（神祇官は古く奈良朝時代よりあつて職員令の内で藤一で次に太政官となつてゐる。神祇の祭典を掌る最も重んじられた地位に於たた人である）同日十七日には早くも全國の各神社にその要旨が通達せられた。それによると

「王政復古旧弊神一洗あらせらるるにフミ、諸國大小の神社に於ては僧形に別當または社僧などと稱する非事は復飾して懸をのほすべし」と嚴しい布令であつた。この時法衣を脱いで祕詞を習得し淨衣に烏帽を姿に身をかへて宮仕えしたのである。また還轉して他の寺へ移り、或いは還俗して僧籍を離れて鎌鋤を持つ

か

て土地に歸るものなど當世界は一大改革をきたした。同日廿八日には重なるように「佛像を以て神祇と致し候神社は以来相改め申すべく候こと」と。或は「佛像を社前に掛け、鐺、梵鐘、佛具の類を置くものは早々に取除くように」と。あつて佛具は全部社敷から取り除き、別當の寺院に移してしまつた。

神佛分離史料によると、平素神官と社僧との間が円満に中かなくなつた神社は時縁到來せりと、社僧追出しに直接行動をとつた處も少なくなかつた。その一例をあげると滋賀県坂本にある日吉山王の社の神官は別當寺の近習寺に七社の神殿の鍵を引渡を要したたが寺側は強く拒否したので神社側は壯士や勤王宗崩れの浪人かと思われ三四十人と人夫數十人が栗園をつくりて鎗、棒などの闘争道具を推つた。山王権現へ亂入して社殿の戸扉の錠を搥り切つて御神作となつてゐる佛像や經卷、法器等を投げ出し悉く火を放つて焼き捨つたという。佛像や經卷、佛具など百二十四桌に及び大般若經六百卷、法華經八卷を算えたのである。思ひ切つた暴動を起したものである。

(おわり) この項未完

吉備町下撫川

運送の丸中運送

御用命は

電話吉備一七八

吉備町 下撫川

建築業 高島組

電話吉備二三八 有線六八一